

伝わるとはどういうことか？

対話やコミュニケーションという言葉は、ある知識とそれを運用するためのスキルというように限定して考える傾向がありました。たとえば、「あの人はコミュニケーション力が高い」という言い方は、どんな相手とも円滑に意思疎通を図ることができる…、どんな人とも流暢に楽しく会話を続けることができる…といった印象につながっています。

しかし、本来対話やコミュニケーションは、表現の形式的な正確さや流暢さが問われるものではなく、「相手に何を伝えたいのか」が問われるべきだと思います。

早稲田大学名誉教授の細川英雄氏は、「対話において大切なことは、価値観を同じにすることではなく、それぞれが異なるという認識をもつこと」だと言っています。

お互いの価値観が異なるということは、多様な考えや発想をもち合えるということであり、未知の問題解決に向けた創造的な対話につながっていきます。

もう一つ大切なことは、「何のために」対話をするかということです。対話の基になる話題やテーマに問われるべき必然性や必要感があるかということです。自分の中に「なぜ？」という問いをもち、対象となる話題を「自分の問題」として捉え、それを相手との丁寧なやり取りによって明らかにしていこうとする姿勢が大切です。

今問われている学校教育における「対話的な学び」も同じ次元で捉える必要があります。

つまり話し合う目的や必要観を感じないまま行う対話や、話し合いの知識やスキルを学ぶこと自体が目的化してしまう対話からは脱却しなければなりません。教室の中では、子どもがお互いの見方や考え方を生かしながら、よりよい問題解決に向かうこと、対話によって心からの「納得と合意」を得ることが何より大切と考えます。

これからの時代に求められる「対話」は、個人や集団の利害だけに収束させずに、対話を通してよりよい社会の実現に参画していくことが求められます。細川氏は、このことを「ことばによる市民性」と呼んでいます。学校教育においても、「対話」を未来の社会や文化への貢献や発展という文脈の中で捉えていくことが必要になるでしょう。